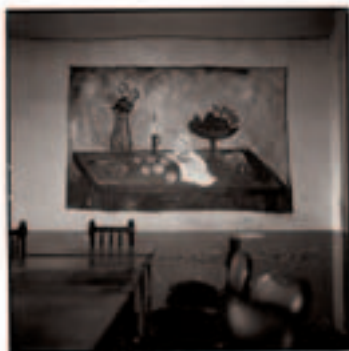


「私は毎日、  
天使を見ている。」

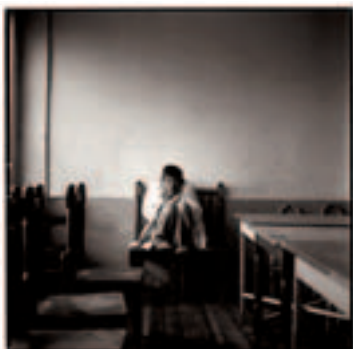
“ I See Angels Every Day. ”

写真 渡邊博史













渡米してテレビ「コマーシャルの仕事」を10年ほどやられて、ある日突然「写真家になろう」と決めたそうですが、その時は撮りたいもののイメージを持っていたのじゃないか。

すでに五〇歳近くになりかけていたので、とにかく自分の撮りたいものを撮ろうとは思っていましたが、何を撮ろうかは決めていませんでした。僕は「なぜそこに行くか」ということはあまり深くは考えていなくて、ある日突然見たものに対して非常に興味を惹かれることが多いんです。一応テーマがあった、それが目的で現場に行くんですが、行ってみると「ああ、すごい」と思う別のものが必ず見えてくるから、どうしてもそっちのほうを撮っちゃうわけです。帰ってきた時には、自分が持っていたイメージとはまったく違う作品になることがほとんどです。

どこかに行つて、見て、そこで起こったことに対して自分が反応する。それはものすごく写真的なこと、外から来るものに対して自分がどう受け答えるか、というのが、写真の表現方法だと思つてます。

**むしろ目的意識的に撮らんとすると、写真が持っている力が発揮できないのかもかもしれませんね。**

よく、何を考えて撮影していますか」と聞かれることがありますが、撮らうという意識だけで、ほとんど考えてないんです。僕は、自分が完全に理解してい

るものや、定説が決まっているものに対しては興味が出てこないわけですね。やはりわからないから行ってみよう。僕自身が人に押し付けがましくされるのが非常に嫌いなタイプなので、撮った写真に対して「こういう見方をしなさい」というようなことはできるだけしたくないんです。

とりあえず惹かれるものがあるって、撮っている時はとにかく面白く思つてファインダーを覗いているだけですね。やっぱり人間が一番面白いとは思つけれど、風景やそこに置いてある物など、人間にまつわるいろいろな面白いものがある。

つづつてみたら、人間は面白いんだと思つたんです。それがきっかけですね。それからはあちこちでポートレートを撮り始めたんですが、二〇〇一年にエウアドルの精神病院を偶然見つけてポートレートを撮った時に、初めて目的意識のようなものを持ちました。ここにいる人間の存在感が強烈



渡邊博史 わたなべ ひろし

北海道札幌出身。1975年日本大学芸術学部写真学科を卒業後、アメリカ、ロサンゼルスに移住。テレビコマーシャル制作の仕事につく。1993年UCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)でMBA修士号を修得。1995年ごろから個人的な作品として写真を撮り始める。2000年本格的に写真に取り組み、ファインアート写真家として活動を始め、以来アメリカで多数の個展を行なう。作品はフィラデルフィア美術館、ヒューストン美術館、ジョージ・イーストマン・ハウス、サンタバーバラ美術館などでコレクションされている。写真集に『私は毎日、天使を見ている。I See Angels Every Day』(窓社刊)がある。

San Lazaro Psychiatric Hospital 2001-2002  
©2004 Hiroshi Watanabe All Rights Reserved  
54ページに渡邊博史写真展の案内を掲載。

「この人は有名な人だから写真の価値がある」というような考え方も潔くないと思う。ものすごく大きさに言ってしまうと、被写体に依存する写真は僕は撮りたくないんです。

三〇年前に米国に行かれた時と比べて、今の日本の社会は変わったと思われませんか？

むしろ変わらないというのが僕の正直な印象です。日本も街の様子はすいぶん変わりましたが、三〇年前に僕が地下鉄の中で見ていた日本人の表情と、今の人たちの表情はまったく同じだと思いましたが。だから人間は全然変わっていないんじゃないかと思いました。

**この数年、写真家として多くの国々を歩きながら撮り続けて、現段階で一番強く感じられていることは何かありますか。**

人間に関して言うと、どこの国の人でもあまり変わらないなというのが僕にとっての結論です。簡単に言ってしまうと、やはり人間は自分が一番大切だと思っているだろうし、それと同じぐらいに自分の愛する人間のために生きているだろうし。それだけだと思えますけどね。それぞれ異なる社会的な組織や置かれた状況の中で、少しでも自分の子どもや家族に対してよくしてあげるにはどうやって生きていけばいいか、ということを考えてながらみんな生きています。じゃないかと思えます。

特に日本では、表現の仕方がすごく大きだと思う。たとえば「こういうものがあることを世の中に伝えたいからそれを写真に撮る」というふうには言われず、僕はちよつと違つたと思つてしましますね。

ポートレートを撮る時も風景を撮る時も、心の中では特に違いはないのでしょうか。

九七年にアフリカに行った時に、偶然撮影旅行のようなものに参加したんです。そうしたら動物の写真ばかり撮る人が多くて、すごくつまらなかった。昔は鉄砲で動物をハンティングしていたのをカメラに替えているだけじゃないかと思つて。他に撮るものがないから、現地で会った人たちの顔を撮ってプリントを

まとめ/山口舞子(編集部)